



福井大学教育学部
附属義務教育学校

No. 01

令和5年4月12日

学校だより

義務教育学校の再スタートの年

校長 牧田 秀昭

コロナ禍もようやく落ち着きを見せ、徐々に元に戻りつつあります。本校でも対策を講じながらも、基本的に通常の活動に戻していきたいと思えます。

昨年度は、このコロナ禍の他に、とても大きな出来事がありました。それは後期課程校舎改修に伴う、文京キャンパスへの移転でした。この4月からは、令和4年夏季休業明けから続いた、前期課程・後期課程が分離された生活から、久しぶりに1年生から9年生までの全校生徒708人が、一堂に集うことになりました。義務教育学校として開設して7年目となる今年度は、義務教育学校の再スタートの年と位置付けたいと思えます。

単に元に戻ったということや、後期校舎がリニューアルされたということだけではなく「再スタート」です。離れて生活していたことで、1年生から9年生までが一緒にいることの良さを改めて感じることができました。「こんな時に先輩に意見をもらいたい」「こんな姿を先輩に残しておきたい」といった、世代を越えて学び合う日常が、この学校には存在していたのです。それがとても貴重だったと再認識できました。また、文字通り社会（大学）の中で生活してきた経験は、二ノ宮での生活でも活かされるに違いありません。

また、分断された喪失感、児童・生徒だけでなく、教職員も同様でした。これからは、単に対話が増えるだけでなく、文京で行われていた後期課程の先生方と大学教員との協働実践が二ノ宮に持ち込まれ、化学反応が期待できます。

それぞれの長所を持ち寄るといえることと言えば、前期課程・後期課程の教員の授業乗り入れによる、5年生以上での教科担任制を再開します。そして、この時期から特に「学び方」そのものの質を向上させていきたいと考えています。「社会創生プロジェクト」で培われた探究する力を柱としながら、全教科でプロジェクト型の学びを取り入れていきます。また、異学年合同での授業や行事を、新たな発想で模索していきたいと思えます。もちろん、1年生から4年生までの学びについても同様に考えています。

プロジェクト型の学びは、多様な個性が生き、生かされる集団でこそ実現できます。「全員一緒に、全員同じペースで、全員同じことを」学習する時代は終わったのです。どの学校も方向性を模索していますが、附属は伝統的に、個を発揮できる、個を尊重できる風土があります。その風土があるからこそ、12年間を見通したプロジェクト型の学習が展開できるのであり、逆に、誰もが自己の存在意義を発見できるのです。

義務教育学校の利点を最大限に発揮して、義務教育終了段階でこれまで以上に Agency（自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力）を発揮し、社会をリードする人材に育ててほしいと願っています。

楽しい1年の始まりです。本年度もよろしくお願ひします。

